Si-report

Socio-Intelligence report

専修大学のビジョンと現状

Vol.1

2006

ミシェル・ベルンシュタイン文庫●専修大学図書館所蔵のフランス革命期関係文献。「人権宣言」をはじめ、「ルイ16世の遺言書」や「マリー・アントワネットに対する死刑判決書」、当時の風刺画・ポスターなど4万数千点に及ぶ。20世紀に収集されたフランス革命関係文献では最大級のものといわれる。

21世紀ビジョン「社会知性の開発」を目指す

専修大学長　法学博士
日髙 義博

専修大学は、創立時の建学の精神を現代的に捉え直し、21世紀ビジョンとして「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を掲げました。このビジョンのもと教育・研究体制の改革に取り組むとともに、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に積極的な大学運営を行っています。

社会知性とは、「専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力」のことです。価値体系が崩れ、規範意識が希薄となり、倫理観が迷走している今日の社会において、この社会知性を開発することは、問題を発見しそれを解決するための能力を身につけるだけではなく、人間性豊かな倫理観のある有為な人材を育成することを大学教育の柱に据えることを意味します。2007年からは「大学全入時代」に突入しますが、本学においては、いかに学生に自信と誇りを持たせることのできる教育を行い、学生の質を保証するのかが重要な課題になっています。「社会知性の開発」を具現化するためには、その能力を持った質の高い学生を社会に送り出さねばなりません。このことは、創立者たちが専門教育によってわが国の人的基盤を築こうとした熱き思いを現代社会において実現することであると考えます。

【Profile】1948年(昭和23年)宮崎県生まれ。70年(昭和45年)専修大学法学部卒業。75年(昭和50年)明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。84年(昭和59年)専修大学法学部教授。2004年(平成16年)法科大学院教授。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考査委員、法制審議会臨時委員などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』(慶応通信)、『刑法における錯誤論の新展開』(成文堂)、『違法性の基礎理論』(イウス出版)など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。

建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年(明治13年)、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、アメリカのコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによっても極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を21世紀ビジョンに据えました。社会知性の開発をどのように具現化するのかについては、各学部あるいは大学院の各研究科によって方法論も力点も自ずから異なりますが、各部局において積極的かつ真摯な取り組みがなされています。

明治32年「黒門」といわれた専修学校正門

相馬永胤

田尻稲次郎

目賀田種太郎

駒井重格

「五大法律学校」とは

専修学校が創立された明治十年代、東京では私立の法律専門学校が次々に誕生しました。中でも、専修学校(専修大学)、東京法学社(法政大学)、明治法律学校(明治大学)、東京専門学校(早稲田大学)、英吉利法律学校(中央大学)の5校は「五大法律学校」と呼ばれていました。日本最初の経済専門学校でもある専修学校は、当時の東京大学法学部と司法省の法学校がそれぞれ英語・仏語で法律学を教授していたのに対し、日本語で教授するという画期的な授業を行いました。専修大学は、わが国の近代法の黎明期にあって、いち早く学窓に近代法の灯火を点した伝統校なのです。

専修大学の21世紀の方向性

21世紀の今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題が山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。

こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。21世紀において本学は、「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」のビジョンのもと、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に諸施策を推し進め、社会知性開発大学としての道を歩んでいくのです。

「専修学校」の未来形
～「五大法律学校」の伝統を現代に～
法科大学院（法務研究科法務専攻）

法曹界で活躍した今村力三郎元総長の像

五大法律学校の一つとして日本近代法の生育に貢献

1880年（明治13年）に「専修学校」として創立された本学は、わが国の近代法の黎明期に五大法律学校の一つとして、日本の近代法が生育していくための人的基盤を作るべく、早くから法曹教育に携わってきました。

そして今、社会の大きな変化の中で、わが国の法学教育のありかたも大きく変動しようとしています。具体的な現れが法科大学院の設置です。本学は、建学の精神を現代的に捉え直し、「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」をビジョンとしています。人間性豊かな質の高い法曹の育成を目指した法科大学院を開設することは、「社会知性」の開発を具現化するものであると考えています。

先端的・国際的ビジネスの舞台で活躍できる法律家を養成

本学の法科大学院は、市民生活に根ざした「社会生活上の医師」とも言うべき法曹や、強い責任感を持ちビジネスの先端的・国際的分野でも活躍できる法律家を育成することを目指しています。

1年次には、法学の基礎知識と理論を十分に理解できるよう法律基本科目を配置、体系的な思考力の習得を目指します。2年次にはケース・メソッドやプロブレム・メソッドを用いた演習を中心に基礎力と実践的な思考力を養います。

また、2年次からは、民事、刑事、企業法務、知的財産、渉外法務、コミュニティーサービス関係など、さまざまな専門分野や先端科目も編成しています。さらに、実践的法律相談、エクスターンシップ、ロイヤリングなどの実践科目についても質・量ともに充実させています。

授業は、少人数教育の対話形式、双方向的授業を導入し、大学内で十分な予習・復習が可能になるよう、法科大学院学生全員に個人専用のキャレル（学習机）を用意しています。さらに、クラス担任制の採用、オフィスアワーの設置など、きめ細かな個別指導を行っています。

法科大学院棟外観

今村力三郎記念ホール

学生を基本にすえた大学づくり
“知と創造のキャンパス” 生田校舎 10号館建設（創立130年記念事業）

「知的創造の場」として地域社会との交流にも配慮

専修大学創立130年記念事業の一環として、生田校舎10号館の建設工事が進められています。10号館建設のコンセプトは次の5点。①創立130年を迎える専修大学の象徴。②「学生を基本にすえた」教育機能主体の校舎。③建物間の連携と「社会知性の開発」拠点の強化。④ゆとりと創造の場の確保。⑤個性と共生の尊重。オープンは平成19年4月です。

L字型をした新校舎は、地下1階（9号館側からの入り口）、地上6階建て。延床面積は約2万1,000平方メートルで、およそ5,400人が収容可能です。学生が気軽に集い、議論し、プレゼンテーションを試みることのできるアカデミーモール（1階）や、くつろげるレストラン・ラウンジ（4階）など、学生にゆとりの場を提供するとともに「知的創造の場」となるように設計されています。また、自然環境との調和、地域社会との交流にも配慮し、「開かれた、クリーンで、思いやりのある」建物を目指しています。

10号館へは、北口（小田急線「向ヶ丘遊園駅」から徒歩）、西口（バスを利用して9号館前ロータリーを経由）、南口（現在の正門・既存校舎から）と、3方向からのアプローチが可能となり、9号館との連絡通路も設けられます。北口は駅から最も近く「新正門」としての役割を担うことになります。10号館の完成により、7・8・9・10号館が連結し、新たな“社会知性開発拠点”となることが期待されています。

10号館の主な機能は次のとおり。

(1)教室―ホールの機能を持つ大教室

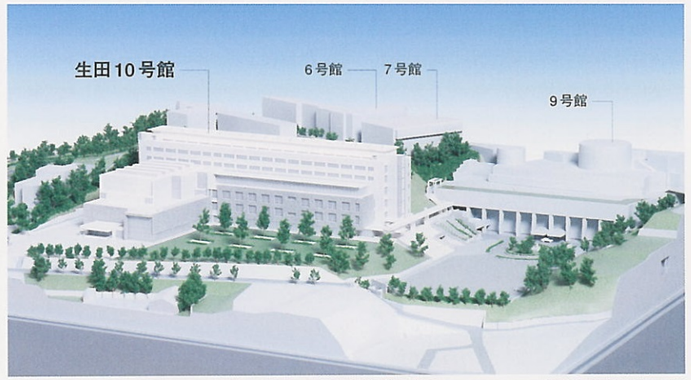
10号館には中小規模教室のほかに、600人規模の大教室を1室設ける予定です。この教室は通常授業だけでなく、講演や音楽会にも対応可能になります。例えば、学内外の教授や著名人を招いての記念講演会を催し、学生はもちろん地域住民の方々の知的交流の場として活用できます。また、専修大学フィルハーモニー管弦楽団をはじめ、学内の音楽サークルなどの活躍の場として機能します。

(2)情報コアゾーン―ユビキタス社会に対応

1階に、学生が大学からの情報を受信したり、外部の情報にアクセスできる機器を設置する専用の空間「情報コアゾーン」を設けています。生田校舎の一画で、学内外・国内外を問わず最新の情報と知識を存分に吸収できる空間。学生たちの知的想像力を刺激します。

(3)アメニティスペース・レストラン―創造的な空間を提供

各所にホワイエ（ロビー）を設け、建物全体にゆとりを持たせています。プレゼンテーションなどに利用するアカデミーモールは、学生に創造的な空間を提供しています。4階には、広いレストランスペースを確保。このスペースは学生ラウンジとしての機能も持っています。これらのゆったりとした空間の中で、学生たちが仲間と集い、活発に情報交換を行うことのできる場所。やがて世界に羽ばたいていく“専修大学の鳳”たちが、パワーチャージできる憩いの場所です。



専修大学創立130年記念事業　生田10号館完成予想図　平成19年4月オープン

視点 1

社会知性を育む教育

経済学部
異文化体験を通して人格形成をはかる

経済のグローバリーゼーションを背景に国際経済学科では、学生がコミュニケーション能力を身につけるとともに、異文化体験を通して人格形成をはかることができる授業科目が設置されています。

「海外特別研修」では、飯沼健子助教授が教室内で授業を行うとともに、夏期休暇期間中にラオス・タイへ学生を引率。ラオスでは開発事業の視察、政府、援助機関の訪問・聞き取り、国際機関やNGOプロジェクト見学、タイではスラム問題、エイズ問題などの改善活動見学を行いました。参加した学生（2年生）からは「国際機関の職員や専門家の方々から伺ったお話やデータは、目からウロコが落ちる貴重なものでした」と、教室では味わえない現地での経験に感動した様子でした。

また、孤崎知己教授担当の「NGO論」においても、メキシコ、インド、東ティモール、タイを訪れ、ストリート・チルドレンや津波被災者の支援をするなど、自分の肌で感じる貴重な体験から学ぶことができます。

法学部
インターンシップで生きた知識を習得

法学部では、組織における社会的機能とその実現過程について、生きた知識を学生が習得できるよう、インターンシップ科目として「社会活動」を開講しています。派遣先は法律事務所などの専門職事務所、官庁・役所や民間企業など。4月からおよそ3ヵ月をかけて事前学習や研修先決定のための面接、研修先研究、ビジネスマナー講習などの準備を行い、夏期休暇中に約2週間の研修（インターンシップ）を行うというものです。

法科大学院進学を目指す白井有希子さん（法律学科4年）は、専修大学法科大学院棟1階の今村記念法律事務所でのインターンシップに取り組みました。裁判記録を読んだり、実際に裁判を傍聴する中で、「具体的に弁護士がどのように訴訟を進めていくかがわかって、法曹の責任がいかに重大かを実感した」と白井さん。また、ある裁判では、「相手側の女性弁護士が鋭く追求する姿を見て刺激を受けた」とも。このような体験の中から生きた知識を習得するのが「社会活動」の大きなねらいです。

経営学部
企業人との連携による経営実践カリキュラム

経営学部では、企業による提供講座として、企業人との連携による「理論と実践の融合」を目指した経営実践カリキュラムを開設しています。これまで、日本内部監査協会、野村證券、日本ユニシス、パソナ、新日本監査法人、日本フードサービス協会などの提供により、産業界の最前線で活躍する方々が直接講義を行う「特殊講義」として講座を開設しています。

平成17年度の「会計学特殊講義（前期）－日本内部監査協会提供講座－」では、各界で活躍する公認内部監査人の講師が、内部監査に関するホットなテーマについて講義を行いました。後期は、「新日本監査法人提供講座」として、公認会計士が講師となり企業や地方自治体および国の運営と会計との関係について実践的な講義を行いました。

さらに、実践プログラムとして企業研修（インターンシップ）科目を展開し、「理論と実践の融合」の深化を図っています。

商学部
「日経STOCKリーグ」レポートコンテストで入選

首藤昭信商学部助教授のゼミナールでは、日本経済新聞社主催の第5回「日経STOCKリーグ」レポートコンテストに参加。2チームが、初出場ながら入選を果たしました（大学部門は779チームが出場）。同コンテストは、バーチャル株式の体験学習、自主テーマによるポートフォリオ学習を行った後、8,000字のレポートにまとめるもの。2チームのテーマは、「明日生きてる企業を探せ！－継続企業安全度ランキングー」と「開示あれば憂いなし！－リスク情報開示の効果－」。学生の一人は、「意見の食い違いから激しい議論となったこともありましたが、おかげで内容も濃くなり、チームもまとまることができた」と。

各ゼミナールでは指導教授のもと、少人数による授業を実施しているため、日頃から自発的意見を述べる場を与えられます。この訓練が、首藤ゼミナールでは今回の快挙につながったのです。

【速報！ 第6回日経STOCKリーグの結果発表が行われ、首藤ゼミナールは、大学部門で最優秀賞に次ぐ「部門賞」を獲得しました。（大学出場チーム数は763）】

文学部
インターネットを利用した外国大学との共同授業・遠隔地授業

「国際間のネットワーク利用共同授業」は、文部科学省のサイバーキャンパス整備事業の選定を受け、韓国の壇国大学やイギリスのケンブリッジ大学など世界の大学と活発な「ネット授業」を行っています。

平成17年6月には、板坂則子ゼミナールとベネチア大学日本文学専攻学生との間で「ネット授業」が行われました。時差7時間の日本とイタリアを結んでの2時間。日伊学生54人がネットを通じ、異文化について語り合う、海を越えての“国際共同授業”が繰り広げられました。授業を受けた学生からは「ベネチア大学の学生は変体がなや日本独自のダジャレ文学を扱うなど研究が多彩。感性も私たちと近い」と刺激を受けた様子。こうした授業は日本の文学・文化を新たな面から解釈し、学生の国際的視野を広げることができます。さらに、学生が授業コンテンツを作成し、情報発信をすることで、プレゼンテーション能力の向上をはかることができるのも大きなメリットです。

ネットワーク情報学部
学生が研究成果を公開する学外展示会「コウサ展」

ネットワーク情報学部の学生有志による研究成果の学外展示会「コウサ展」が平成18年2月4日、5日、日本科学未来館で開催されました。「研究成果を通じた創造環境の提供」というコンセプトのもと、自分たちの成果物を一般に公開することで、さまざまな視点からの意見が得られ、それを新たな発想や改良、創造の原動力にしようというのが大きな目的です。今回の展示会は昨年に引き続き2回目の開催。“前回を越える規模を”という目標どおりに、今年は2日間で約400人の来場者があり会場は大盛況となりました。

出展は、説明用パネルを用いた対話形式。『思考の有無による記述者のストローク変化の差異』（香山研究室・学生）、『Re：placed Sound－音と知覚の時間差を題材にした視覚化表現－』（上平研究室・学生）、『情報による意志の選択』（本江プロジェクト・学生）など出展作品はユニークなものばかり。会場には企業や他大学からの見学者のほか、一般の方々の来場も非常に多く、学生の技術レベルの高さに賛嘆する声も多く寄せられました。

視点 2

知の発信のための研究開発

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業として本学から４つの研究が選定されています。

●歴史学研究センター「フランス革命と日本、アジアの近代化」

フランス革命史料研究の蓄積と日仏間の研究交流の実績を踏まえ、①フランス革命に関する研究のさらなる深化と新しいフランス革命史像の構築、②フランス革命が日本・アジア諸民族に近代市民社会形成上与えた影響を明らかにする、③研究の世界的交流を図り、世界史的視野を持つ若手研究者の育成、④未公開革命関係史料の公刊とシンポジウムによる研究成果の公開、の４点に重点を置いて研究を進めています。また、平成15年度の整備事業選定以後、毎年国際シンポジウムを開催しています。

本学所蔵資料
(p.01参照)

●都市政策研究センター「イノヴェーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」

平成16年度選定の本プロジェクトは、川崎の可能性を探り、再構築のための具体的な政策提言を行っていくことを目的としています。社会科学各分野の本学研究者に加えて、民間企業や研究機関、川崎市などの自治体から多様な分野の研究者、実務家の参加を得て、伝統的な都市政策の視点の枠を超えた、実効性のある新しいタイプの都市政策形成に関わる研究を行っています。研究成果は、国際シンポジウム、公開講座などにより市民や産業界に公開しています。

●中小企業研究センター「アジア諸国の産業発展と中小企業」

本プロジェクトは、経済発展段階の異なるアジア諸国の中小企業を総合的に研究・調査し、中小企業の役割と問題点、それらの共通性と特殊性を明らかにして、アジア中小企業論の構築と各国中小企業政策の発展に寄与することを目的とし、平成16年度に選定されました。シンポジウムなどで研究成果を発表する一方、アジア諸国での中小企業研究のネットワーク構築へ向けて体制の整備を行います。将来的には「アジア中小企業白書」刊行を視野に入れて、その実現への基礎を作ることを目指しています。

●言語・文化研究センター「Anglo-Saxon 語の継承と変容」

平成17年度選定の本プロジェクトは、Anglo-Saxon語が通時的にどの要素が継承され、どの要素が変容したかを検討することを目的としています。英国の大学図書館、大英図書館などに収蔵されている多くの写本群に光を当て、中世英文学の基礎資料を包括的に集積するとともに、デジタルベース化して研究態勢を整えます。また、デジタル写本を作成して、写本の語彙、文体、統語構造などを分析し、中世英文学の分野において、国際的な貢献を目指します。その成果は、シンポジウムや公開講座などで公開されています。

視点 3

社会知性の開発を担う人材の輩出

第１回卒業式が行われた明治会堂

全日本女子バレーチームのアナリストとして北京オリンピックを目指す

試合を見ながら、相手チームの特徴や傾向を分析し、その結果を自チームの戦略・戦術に生かす、という重要な役割を担うアナリスト。渡辺啓太さんは、在学中から日本バレーボール協会の派遣で全日本女子チームのアナリストとして試合に帯同。その活躍ぶりに“専修大学学長賞”が贈られました。現在はＶリーグ男子や海外のチームの試合にも携わり、将来有望なアナリストとして期待されています。

中学・高校とバレーを続ける中でアナリストに関心を持った渡辺さんは、情報技術を身につけたいとネットワーク情報学部へ進学。“プロジェクト”（少人数で共同研究を行う演習科目）でも、「バレーに限らずいろいろなスポーツに関する情報分析をテーマにしたことで、アナリストの仕事にも生かすことができた」といいます。

試合分析は学部で学んだ技術を生かしパソコンを駆使。「相手の試合を入念に観察し、分析する。その戦術が生きて、チームが勝ったときが一番うれしい」という渡辺さん。今の目標は「北京オリンピックで全日本女子チームの金メダル獲得に貢献すること」。そして「日本はもちろん、世界で一番のアナリストになること」。

バレーボール・アナリスト
渡辺 啓太 さん
（平成18年３月ネットワーク情報学部卒業）

恩師に“夢”育まれ「米大陸」に賭ける

ラテンアメリカをフィールドにする経済学部国際経済学科・狐崎知己教授のゼミは、国際協力、NGO、ボランティアなどの分野で、海を越えて活躍する卒業生が少なくありません。

同学科一期生の大澤武志さんは、そのパイオニア的存在。一昨年から中米グアテマラで、在外公館専門調査員として活躍。多忙な毎日を送っています。

「他言語を身につけたい」と専大に入学。しかし、イメージとは違った大学生活にとまどい、次第にキャンパスから遠のいていった時、示唆を与えてくれたのが狐崎教授でした。中南米に興味を持ち、夢中で走り始めました。休学してメキシコのイベロアメリカーナ大学に１年間留学。大学院修士課程で再び同大学へ長期留学し、FTA（自由貿易協定）先進国と言われたメキシコの自動車産業を中心に研究を深めました。

「粘り強く抜群の行動力を持つ」と大澤さんを狐崎教授は評しています。「将来はメキシコ、グアテマラでの体験を基に、北・中米の地域統合への知識を深め、日本経済との橋渡しをしたい」と意欲に燃えています。

（ニュース専修より転載）

在グアテマラ日本大使館・専門調査員
大澤 武志 さん
（平成13年３月経済学部卒業・平成16年３月大学院経済学研究科修士課程修了）

最高の喜びは脚本が想像以上の映像になったとき

竹野内豊とチェ・ジウのダブル主演による日韓両国を舞台にした話題作「輪舞曲～ロンド～」。その脚本を担当した渡邉睦月さん。これまでにも「ボイスレコーダー～残された声の記録～ジャンボ機墜落20年目の真実」、「日本のシンドラー　杉原千畝物語　六千人の命のビザ」などの社会派ドラマも手がけました。

文学部・大学院を通して現代文学が専門の柘植光彦教授に師事。進路に悩んでいた頃、何気なく見たドラマ「古畑任三郎」に衝撃を受け、「三谷幸喜さんの脚本に、ものすごく引きつけられて、これだ！ とひらめいた」渡邉さん、翌日には脚本家になろうと決意します。その後、新藤兼人氏の「シナリオ講座」に通いながらチャンスを待ち、平成12年、「教習所物語」第８話でデビューを果たしました。社会派からコメディー、恋愛ものまで幅広いテーマを扱うため、膨大な資料を一人で調べますが、「柘植教授に鍛えられたので苦になりません」と笑う渡邉さん。最高の喜びは「脚本が想像以上の映像になったとき」。歴史ものが好きで、「いつかは『大河ドラマ』を」と胸に秘めている渡邉さんです。

（ニュース専修より転載）

脚本家
渡邉 睦月 さん
（平成６年３月文学部卒業・平成９年３月大学院文学研究科修士課程修了）

今後の取り組み

- 平成19年4月、生田校舎10号館オープン（創立130年記念事業）
- 第3キャンパス開設の検討
- 創立130年記念事業の多方面での展開
- 新学部・新学科設置に向けて検討中
- 会計専門職大学院設置に向けて検討中
- キャリア教育の充実
- 学生支援体制の充実（『知のツールボックス』発行、留学の推進など）
- 高等学校との教育連携（高大連携）の促進
- 社会とのネットワークづくりの推進
- 社会知性開発研究センターの活動拡大

「Si-report」とは

「**Si**」とは……

「社会知性：**Socio-Intelligence**」の頭文字［**S**］［**I**］

と

「**SENSHU Intelligence**」の頭文字［**S**］［**I**］

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。

シンボルマーク＆カラー

Sの字は専修大学の「S」と21世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」の「S」であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。

ペットマーク

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるよう更にかわいくデフォルメしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学 学長室企画課

（神田校舎）〒101-8425　東京都千代田区神田神保町3-8

（生田校舎）〒214-8580　神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

Tel:044-911-1252　Fax:044-900-7803

http://www.senshu-u.ac.jp/